長崎県教育センター
Nagasaki Prefectural Education Center

「省察」から「探究」へ

How can we transform our own learning?

新たな教職員の学びを
探究する

新たな教職員の学びの実現に向けて
取り組んだ七つの事例

INDEX

01 … 発行に当たって ～「省察」から「探究」へ～

02 … 長崎県の課題と改善の視点

03 … 具体的な取組

＜課題1＞「新たな教職員の学び」の実現に関する取組

事例１ 義務教育研修班
事例２ 高校教育研修班
事例３ 特別支援教育研修班
事例４ 教育相談班
事例５ 企画・次世代型研修推進課

＜課題2＞ オンライン研修の効果的活用に関する取組

事例６ 義務教育研修班
事例７ 高校教育研修班

04 … 探究を支える所内コミュニティ構築に関する取組

裏表紙 本事業推進に当たり支援をいただいた方からのメッセージ

01 発行に当たって ～「省察」から「探究」へ～

長崎県教育委員会は、令和５年度から２年計画で独立行政法人教職員支援機構（NITS）と委託契約を結び、「『新たな教職員の学び』協働開発推進事業」に取り組んできました。

本事業は、全国の教育委員会等と連携し、「令和の日本型学校教育」の実現に向けた新たな教職員研修の開発を行うとともに、新たな教職員研修の企画立案・運営を担う人材の育成を図ることを目的としています。

本事業の推進に当たり、長崎県教育センターでは、目指す教職員の姿を「探究心を持ち　自律的に学び続ける　教職員」とし、先ず私達自身が研修の本質を問い続けながら研修実施者としての在り方を「省察」し、「新たな教職員の学び」と当教育センターとの関わりについて「探究」し続けてまいりました。

その旅は、「省察」から「探究」へ。実践の捉え直しを通して自己の価値観を振り返り、気付くことに重点を置いた研修から、その気付きを契機に新たな問いを立て、主体的な実践を生み出すまでの研修へ発展させる営みでした。

この冊子は、この２年間、探究的に本事業に取り組んできた長崎県教育センターの歩みの記録として、各課・班が取り組んできた研修改善の具体的な事例を紹介しています。研修に参加し学ぶ教職員の方に、また、教職員研修及び校内研修を担当する方に、あるいは中央教育審議会答申（令和４年12月）に示される「新たな教師の学び」について改めて考える際に、本冊子を御活用いただければ幸いです。

新たな教職員研修の開発やそれに伴う人材の育成における現在地は、これからも挑み続ける旅の途中だと捉えています。長崎県教育センターでは、今後も答えのない「問い」に果敢に挑み、目指す教職員の姿の実現に向け、「探究」し続けてまいります。

長崎県教育センター
所　長　竹之内　覚

※長崎県教育センターでは、中教審答申で示された「新たな教師の学び」について、対象を教職員に広げ「新たな教職員の学び」と表現しています。

02 長崎県の課題と改善の視点

令和４年１２月中教審答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」では、新たな教師の学びについて具体的な姿などが示されました※。長崎県教育センターでは中教審答申等を受けて以下の二つの課題を設定するとともに、対象を教師から教職員に広げて研修改善の取組を行ってきました。

※　本ページ下部には、中教審答申の「新たな教師の学び」について長崎県教育センターにて整理したものを記載しています。

課題１「新たな教職員の学び」の実現に向けた課題

取組前の実態

- 現場の経験を生かした省察を一部研修へ導入済み（省察、ラウンドテーブルの実施）
- 対話による省察場面では、実践の情報交換にとどまることがあった

改善の視点

探究心を持ち 自律的に 学び続ける 教職員

具体例の一部

- 省察及び探究の捉え直し
- 省察の効果を高めるファシリテーターの配置　等

課題２ オンライン研修の効果的活用に向けた課題

取組前の実態

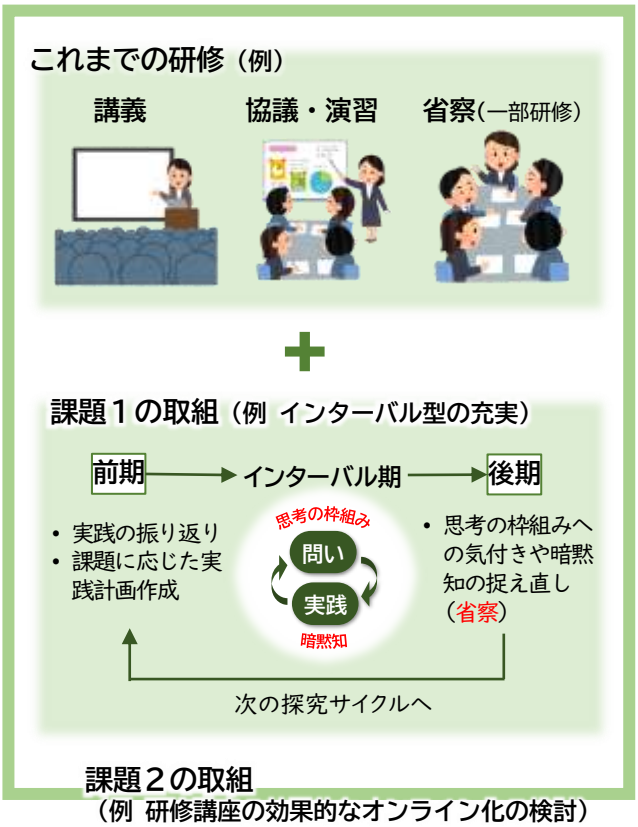
- 離島部や移動に長時間を要する半島部の存在
- 悪天候による移動への影響　等

改善の視点

条件・環境によらない
「教師が望む教師に必要な質の高い研修」

具体例の一部

- 研修への参加方法を参加者が選択できる仕組みの構築 等



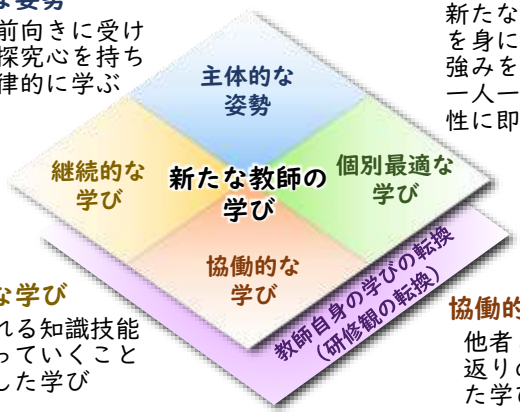
中教審答申（令和４年12月）を基に長崎県教育センターにて整理

「第Ⅰ部　4.今後の改革の方向性（1）「新たな教師の学び」の実現」

教師自身の学び（研修観）を転換し、「新たな教師の学びの姿」を実現する

目指す学びの姿

中教審答申（令和4年12月）を参考に図式化



主体的な姿勢
変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶ

個別最適な学び
新たな領域の専門性を身に付けるなど、強みを伸ばすための一人一人の教師の個性に即した学び

継続的な学び
求められる知識技能が変わっていくことを意識した学び

協働的な学び
他者との対話や振り返りの機会を確保した学び

多様な学び

- 教師の学びの内容の多様性
- 自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」も含む学びのスタイルの多様性

探究的な学び

- 教師自ら問いを立てて実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく学び

理論と実践の往還

- 学んだ理論を学校現場で実践することと、自らの実践を理論に基づき省察すること

事例1 義務教育研修班

1　研修改善のテーマ　　「新たな教師の学びの姿の具現化」　～省察から探究へ～

2　研修改善の具体

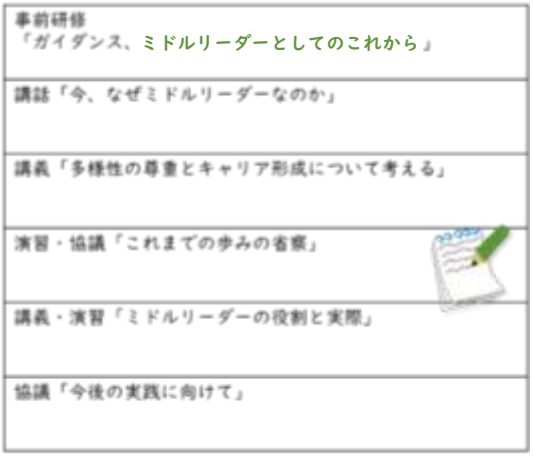
（1）研修講座名　　公立小・中学校「次代を担うミドルリーダー」研修講座＜継続-1年目前期＞

（2）研修目標

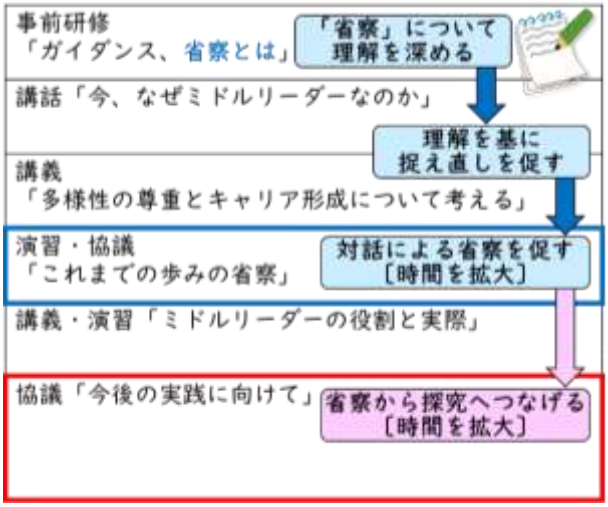
学校運営に参画する教員に対する研修で、学校課題を解決するためのマネジメントや、ミドルリーダーとして身に付けるべき資質・能力についての講義・演習等を通して、組織的、実践的に学校運営に参画し推進する人材の育成を図る。

（3）改善を図った点

令和５年度



令和６年度



（4）研修参加者の変容が見られた場面・感想　【研修報告・振り返り】から

省察に関する内容	探究に関する内容
これまで無意識に行ってきた自分の教育実践に共通するキーワードを見付けることができました。	今後に向けての方向性やヒントを得ることができたので、とてもよい研修になった。
これまで自己の中で明確ではなかったミドルリーダー像が少し見えてきたような気がします。	今の自分にできていることや課題を見つめることができ、今後の方向性を見いだす機会になりました。
他者の教育観に触れたことで、自身の教育観を再確認、見直すことにつながりました。	同僚や組織全体のことを考えてみること、その中から担当する校務に関する課題解決を図りたいです。
教育の理想や根本理念を再確認できました。	初任研や経年研、校内研究の授業づくりに積極的に関わりたい。

（5）取組により明らかになったこと

- 研修デザインの見直しに加え、時間枠の拡大によって多様な意見の交流を保証することで、新たな実践につながる「省察」と「探究」に言及する振り返りが多く見られた。
- 省察の視点として「実践の価値や意味を見いだすこと」を明示することで、研修報告にあるように「自己の教育観」や「ミドルリーダー像」の言語化が図られていた。
- 探究の視点として「高めたい力と関連する教育実践」を明示することで、「今後の取組」の具体的な設定がなされていた。

（6）取組の振り返りと今後の取組に向けて

今後も、多様な実践を重ねた参加者が持つ「教育観」や「ミドルリーダー像」についての協議の充実に取り組み、研修観の転換に向けたより良い研修づくりを目指したい。

事例2 高校教育研修班

1　研修改善のテーマ　　「省察から探究へ」

研修参加者が実践の捉え直しを通して自己の価値観を振り返り、気付くことに重点を置いた研修から、その気付きを契機に新たな問いを立て、主体的な実践を生み出すまでの研修へ発展させる。

2　研修改善の具体

（1）研修講座名　　県立高等学校中堅教諭等資質向上研修（１１年目）（校種別研修）

（2）研修目標

○ １０年間の教育実践を振り返り、自身の特徴や考えの枠組みに気付き、今後のミドルリーダーとしての実践の目標を立てることにより、実践への意欲を喚起する。

○ 主体的・対話的で深い学びに向けた取組について、協議を通して自らの教育実践の特徴や考えの枠組みに気付くとともに、視野を広げ、学年・学校の教育に反映させていく契機とする。

（3）改善を図った点

令和5年度改善

○ 協議において、「どうしてこうなったか」「何が大切だったのか」「こうしてみたい」という、行為の裏にある思考、感情、望みを探る部分を大切にした。

＋

令和6年度改善

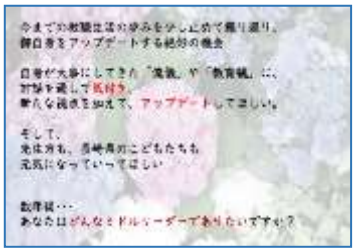
○ 研修目標の設定・共有

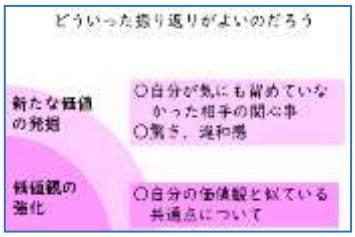
○ イントロダクションの時間の導入

○ 研修を貫く問い『数年後、あなたはどんなミドルリーダーでありたいですか?』を設定

○ リフレクションシートの導入
- これまでの自身の教育観
- 二日間の研修での気付き
- 今後、どのような教育実践を行っていきたいか

○ リフレクションの時間の導入





（4）研修参加者の変容が見られた場面・感想

【研修参加者の声】
　これまでは人に頼ったり、他教科の先生と協働したりすることが少なかった。自身の多忙さと同じく、他教科の先生もお忙しいので、話し掛けることがはばかられてあきらめていたように思う。しかし、新しいことを始めるためには、自分から思い切って行動することが必要だと感じた。また、指導案作成について、経験が足りず自信が持てない状況にある。実際に行っていることや、言葉掛けをしていることを整理して指導案に落とし込むことで、自分のやりたいことや思いが伝わることに気付いた。今年度の研究授業については、拒否感を持たず、意欲的に取り組みたい。

（5）取組により明らかになったこと

- イントロダクションの時間の導入により、①研修への緊張状態を和らげ、②自発的に学ぶ意欲を生み出すことができた。
- リフレクションの時間の導入により、①研修での学びを整理し、②研修での学びを実践に移す意欲を高めることができた。

（6）取組の振り返りと今後の取組に向けて

　研修参加者とともに研修を作れた。今後も研修参加者の姿を思い浮かべ、「どのようしたら豊かな気付きが生まれ、その気付きを次なる問いにつなげてもらえるか」を想像しながら研修デザインを行っていきたい。

事例3 特別支援教育研修班

1 研修改善のテーマ

省察から実践の足掛かりへ　～省察・対話・探究への挑戦～

2 研修改善の具体

（1）研修講座名

公立学校教職員3年目研修
〈特別支援学校教諭等、養護教諭、栄養教諭、特別支援学校実習助手、寄宿舎指導員〉

（2）研修目標

教職経験3年目の教職員に対する研修で、倫理・服務規律や学校が抱える課題等及び教科等の授業力向上を目指した研修を通して、実践的な指導力の向上を図る。

（3）改善を図った点

令和４年度（改善前）

形態　対面
内容
- 教職員に求められる倫理と使命
- ３年間を振り返って
- 学習指導要領と授業づくり
- 自立活動について（講義型で実施）

▶

省察・対話への挑戦

令和5年度（改善1年目）

形態　対面
内容
- 教職員に求められる倫理と使命
- 3年間を振り返って（省察と対話）
- 学習指導要領と授業づくり（省察と対話）
- 自立活動について

改善　省察の追加
課題　実践の語り合いに重きが置かれ、気付きを得にくい

▶

省察・対話・探究への挑戦

令和6年度（改善2年目）

形態　対面
内容
- 教職員に求められる倫理と使命
- ３年間を振り返って（省察と対話）
- 学習指導要領と授業づくり（探究）
- 自立活動について（省察・対話・探究）

改善
- 観に気付く省察と対話
- 変化の兆し
- 新たな実践への足掛かり

（4）研修参加者の変容が見られた場面・感想

自分の実践を「なぜそうしたのか」「大事にしてきた思いは」という視点で捉えようとしていた。自分がこれから「誰と」「何を」したいのかという具体的な実践への意欲が明確になった研修参加者が多く見られた。

【研修参加者の声】
「なぜ？」という問いにより、自分がどうしたいと思ったから今があるのかに気付いた。子どもや保護者と関わっているときの自分はきっと憧れの自分になっていると思った。

（5）取組により明らかになったこと

- 省察や対話について事前研修動画で示すことで研修への目的意識を高められる。
- 省察や対話、視点を明確にした協議により、客観的に自分を捉えた次の具体的な実践へ向けた探究へとつながる。

（6）取組の振り返りと今後の取組に向けて

試行の振り返りや参加者の声を基に、内容構成や時間の配分など再考しながら研修参加者と実施者が一緒に学ぶ研修づくりを目指したい。

事例4 教育相談班

1　研修改善のテーマ　　省察から探究へ　～省察による気付きを、個別研修の実践につなげる～

2　研修改善の具体

（1）研修講座名　　公立学校教職経験１５年経過教員研修（１６年目）〈継続－前期・後期〉

（2）研修目標

〈前期〉研修参加者が、組織的に諸課題に対応する同僚性・協働性の大切さに改めて気付き、自らの実践に問いを立てて、個別研修の見通しを持つ。

〈後期〉研修参加者が、自らの実践について語ったり、他者と対話したりすることを通して、自らの実践の特徴や考えの枠組みを捉え直したり、個別研修について問い直したりしながら、自己の在り方に気付く。このことを通して、自らの実践に新たな問いを立て、今後の個別研修に生かす。

（3）改善を図った点

前期（5月24日）【リアルタイム型】		後期（11月27日）【集合型】	
〈研修内容〉 講義「教職員の服務規律」 講義「教職員のメンタルヘルス」 講義「同僚性・協働性を生かしたOJTの考え方」 班別協議「教職員生活を振り返る」 個別研修の計画	各所属校での個別研修	〈研修内容〉 協議①同校種班での個別研修発表（3～4人班　125分） 協議②異校種班での個別研修発表（3～4人班　115分） 協議③同校種班での情報共有 個別研修の再構成	各所属校での個別研修・報告
◎協議では、「自分の強みやよさ」「同僚との関わり」に着目した振り返りシートを活用し、それを生かした個別研修の見通しを持たせた。		◎協議の時間を大幅に増やし、同校種だけでなく、異校種の教員との協議を行うことで、多角的な視点からの気付きを促すようにした。	

（4）研修参加者の変容が見られた場面・感想

【研修参加者の声】

- 今回の研修で、自分が一番大切にしていることは「生徒が中心」であることだと再認識しました。生徒一人一人が今までに何を学んできたのか、これから学びを深めるにはどうしたらよいかを考えて教育活動を行いたいと考えています。
- 研究協議の時間が長く、不安でしたが、異なる職種や校種の先生方に意見や気付きをいただくことで、自分自身のよさや強み、また改善できる点を見付けることができました。

（5）取組により明らかになったこと

各学校のミドルリーダーである研修参加者が、自分を見つめ直し、教職員としての在り方に気付くことは、今後の教職生活のエネルギーになり、学校全体の活性化にもつながると実感した。

（6）取組の振り返りと今後の取組に向けて

省察を中心とした研修のねらいや効果を研修参加者に十分理解してもらうよう、気付きを促すための方法を改善する。

事例5 企画・次世代型研修推進課

1 研修改善のテーマ

気付き・実践・省察
～授業改善を自身の物語として語り合う省察による自分の授業観の明確化～

2 研修改善の具体

（1）研修講座名

中学校外国語科授業力向上研修講座
～生徒が主語の授業づくりを目指して一緒にTrial&Error しませんか～

（2）研修目標

中学校外国語科（英語）を担当する教員に対する研修で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた生徒が主語の授業づくりを目指し、教員同士が協働しながら行う授業研究、授業設計、実践、振り返り等を通して各自の授業観及び授業改善への気付きを得る。

（3）改善を図った点

令和４年度（改善前）	省察の追加 令和５年度（改善１年目）	気付き・実践・省察のサイクル化 令和６年度（改善2年目）
形態 リアルタイム・オンライン 内容 ・実践報告と協議 ・研修参加者の振り返り ・単元構想 ・評価問題づくり 課題 授業を捉える視点・視座を固定化させる内容だった	形態 リアルタイム・オンライン 内容 ・各自実践の情報交換 ・外部講師による講義 ・研究協議（省察） ・評価問題づくり 改善 ・振り返り（省察）追加 ・探究的な学びに向けた問い立て、解決策検討追加 課題 省察による気付きで止まり、実践と振り返りができない	形態 インターバル型 対面、リアルタイム・オンライン 内容 前期 ・自己目標設定（省察） ・授業参観 ・研究協議（省察） ・実践計画作成 後期 ・実践振り返り（省察） ・次の課題設定 改善 ・インターバル型による探究的な学びの実現 ・本質的な気付きの促し

（4）研修参加者の変容が見られた場面・感想

問いを立て、実践を積み重ね、振り返り、次につなげる探究的な学びの重要性を感じた研修参加者が多かった。

【研修参加者の声】
教師にとって、振り返りは必須であり、義務であるという言葉をいただき納得することできた。目の前の生徒の実態に合わせて、教師も振り返り、これでいいのかと自問自答しながら毎時間の授業に意味を持たせた計画をしていかなければならないと思った。

（5）取組により明らかになったこと

- 授業に関する知識や情報を十分持っていても、それを生かす方法を考える機会が少ない。
- 対話を通して各自の知識や情報が共有され、それらが実践に基づいた解釈や咀嚼（そしゃく）がなされていた。
- 安心して学べる環境と時間、少しのファシリテーションがあれば、学び続ける姿勢をサポートできる。

（6）取組の振り返りと今後の取組に向けて

今後も研修に参加していただいた方のニーズを把握し、研修観の転換に向けたより良い研修づくりを目指して、研修実施者自らTrial&Errorしていきたい。

義務教育研修班

1　研修改善のテーマ　　オンライン研修の効果的活用

2　研修改善の具体

（1）研修講座名　　複式教育研修講座

（2）研修目標

　複式授業の進め方に課題を持つ教員に対する研修で、複式授業の特徴や間接指導でのポイント等についての講義・演習・協議等を通して、複式授業における学習指導の実践力の向上を図る。

（3）改善を図った点

　参加者が受講形態（【対面】【リアルタイム・オンライン】）を選択・意思決定できるようにした。

研修会場『対面』

協議の様子 『対面』

『リアルタイム・オンライン』

配信ブースの様子

講座スタッフの動き

（4）研修参加者の変容が見られた場面・感想

受講形態を選択・意思決定できるようにしたことで研修参加者の主体者意識が高まった。

【研修参加者の声】　『リアルタイム・オンライン』
　実際に複式授業を参観させていただいたことで、教師の動きや指導の仕方、授業の進め方などをイメージすることができました。リアルタイムでは、様々な視点でカメラを準備していただき、自分が気になるところの様子を自由に行き来しながら見ることができたので、とてもわかりやすかったです。

（5）取組により明らかになったこと

- 初の試みであり、機器の設定やリハーサル等に時間と労力を要した。
- リアルタイム・オンラインであっても参加者のニーズに十分応えることができる。

（6）取組の振り返りと今後の取組に向けて

　長崎県の地理的状況を鑑み、どのような条件下であっても「教職員が望む教師に必要な質の高い研修」を提供するために、今後もオンライン研修の在り方について検討を重ねていきたい。

事例7 高校教育研修班

1 研修改善のテーマ

オンライン研修の効果的活用
～県内対面と県外リアルタイム・オンラインの双方に対応した音楽講座の実施～

2 研修改善の具体

（1）研修講座名　中学校音楽科・高校芸術科（音楽）授業力アップ研修講座

（2）研 修 目 標　歌唱（合唱）及びアンサンブルの演習を通して、中学校・高等学校・特別支援学校での音楽の魅力ある授業づくりをするための実践的指導力の向上を図る。

（3）改善を図った点

令和6年度改善
○ 対面（長崎県）に加え、リアルタイム・オンライン（宮崎県の参加者対象）を同時に開講
○ リアルタイム・オンラインで、より良い音質（合唱やピアノの音色）で配信できるような設定
※ 音楽配信専用の機器、複数台のカメラ設置、配信（WebexとYouTubeの併用）
○ 対面とリアルタイム・オンラインの双方の研修効果が高められるような内容構成や配信方法の工夫

長崎県参加者が大講堂でパート練習中に宮崎県参加者との協議を行っている様子

（4）リアルタイム・オンラインでの受講者・担当者の感想

【受講者】高校音楽は大多数が受講する研修会が年々少なくなっており、今回のような様々な「きっかけ」を与えていただく講座は、非常に有意義なものでした。

【担当者】講座を配信していただくために、大変な御準備をいただきましたこと、本当に感謝しています。（配信機材の写真を拝見しましたが、カメラとマイクと端末の数に驚きました！！）また、講義中は音量や音質について、こちらからの細かな要望にも大変丁寧に対応いただきました。

（5）取組により明らかになったこと

音楽づくりの場面等をより良い音質で配信するためには、音楽専用の高音質マイクや複数台のカメラの使用が必須となり、運営にはコスト（設備、配信テスト等の準備、人員、IT技能、講義者への負荷など）が必要である。しかし、実技を伴う音楽科の講座においても、リアルタイム・オンラインで遠隔地に研修の提供が可能であることが実証できたことは大きな収穫であった。

（6）取組の振り返りと今後の取組に向けて

対面の音楽講座のライブ感を、リアルタイム・オンラインでどこまで配信できるかということに挑戦した講座であった。

準備から当日の運営まで、スタッフ全員のチームワークがあったからこそ実施できた講座であり、運営をスムーズに行うためにはチーム内の「対話」や「協働」が大切であることを実感した。

今後も、音楽に関する研修講座やオンラインでの実技指導の提供など、積極的に取り組んでいきたい。

「新たな教職員の学び」の実現に向けた探究を支える仕組み

長崎県教育センターでは、研修改善の取組を推進する組織として、より探究的、協働的に学ぶことができるように二つの研修会を実施しています。

この研修会は、教育センター所員が**自身の「新たな教職員の学び」の姿を実現すること**、前例や実績のない試みに**挑戦する所員を支援する環境を醸成すること**を目的として実施してきました。

下記以外にも、視察先や訪問いただいた方との情報交換を実施し、学びを深めることができました。

探究、実践共有、省察の場 ～玖島の杜研修会～

本事業１年目は、所員を対象とした研修会を必要に応じて実施していました。

２年目となる令和６年度からは、長崎県教育教育センターにおける**研修改善の取組を探究し、その営みを共有、省察する場**としての研修会（玖島の杜研修会と呼称）を開始し、研修改善に向けた探究に伴走しながら実施してきました。

令和６年度 実施内容及び御支援していただいた方

第１回　特別研修員の教職員支援機構１年間の学びの共有、「探究」の探究
第２回　資料「NITSからの提案」等を参考にした研修デザインに関する学び
第３回　「探究」の探究　**講師　教職員支援機構（NITS）　目見田 紋未 氏**
第４回　次年度の研修構想　**講師　福井大学大学院連合教職開発研究科 清　川　亨　氏**

「なるほど!」 意味を捉え直す対話の場 ～N-Café～

研修改善の取組を進める中で、省察や探究等のように意味の確認が行われずに使われる言葉や実践場面が出てきました。今後、所員の入れ替わりによっても文脈が共有されない場面が生じることが予想されました。

そこで、新たな教職員の学びに関する言葉や概念について、他者の視点を生かして多角的、多面的な視点から整理し、自身が暗黙にしていた理解を捉え直す**雑談以上研修以下の学びの場**（N-Caféと呼称）を設けました。

本事業推進に当たり支援、伴走いただいた方からのメッセージ

「主語を意識した研修で長崎県の先生を元気に！」

福井大学大学院連合教職開発研究科
副研究科長　清川　亨　教授

令和６年11月末に教育センターの所員研修である玖島の杜研修会にお招きいただきました。１年ぶり２度目ですが、特に印象的だったのはグループセッションです。今年度センター１年目の方々も含め、皆さんが遠慮せず本音で語り合っていました。

手段が目的化することがよくあります。所員の皆さんの様子から、長崎県教育センター方針「長崎県の先生と子どもたちを元気にする」を最上位目標とした「主語を意識した研修」への転換が加速的に進んでいくと確信しました。

時代はVUCAからBANIの時代に。研修参加者を主語とした研修を受けた先生方の授業は子供が主語になっていきます。子どもたちが今より一層自走していく姿が長崎県のいたるところで見られそうで楽しみです。

「場所は離れていても　一緒に協働を！」

独立行政法人教職員支援機構（NITS）
教職員の学び協働開発部
研修マネジメント室
目見田　紋未　主任

今年度、長崎県教育センターの皆様の学びの様子や、研修作りの様子を拝見させていただきました。皆様の前向きな姿勢や、お一人お一人の豊かな経験や思いに、私自身とてもたくさんの学びの種をいただきました。私だけではなく、長崎県の皆様の様子を見てきたNITS職員も同じだったと思います。私達NITSの実践が皆様とつながり、皆様の実践が私達NITSの学びになり…と、場所は離れていても、「新たな教職員の学び」に向かって一緒に協働できているようにも感じています。これからも引き続き、長崎県の挑戦の様子を様々な形で学ばせていただければ幸いです。私もNITSの中で引き続き考え、学び、実践していきたいと思います！

独立行政法人　教職員支援機構　受託事業
令和5・6年度「新たな教職員の学び」協働開発推進事業

令和７年３月

発行者　長崎県教育センター
Nagasaki Prefectural Education Center